

「不易」と「流行」 誠実・克己・忠恕

～『一』の心に学ぶ～

一というはじめの数に ふみ出す 日なり 今日なり 正しくあらん

これは、九条武子さん(1887年(明治20年)~1928年(昭和3年)、日本の教育者・歌人、京都女子専門学校(現・京都女子学園、京都女子大学)を設立、1923年の関東大震災で自身も被災するが一命を取りとめ、震災による負傷者・孤児の救援活動(「あそか病院」などの設立)などさまざまな事業を推進した)

の歌です。

では・・・どうぞ

まずは、「一」という字について考えてみよう。

第一に「初め」「初の心」ということです。

第二に、「一」は中国の『易経』では「一は天を指す」とい、『老子』は「一は真であり、善である」といいます。つまり、正しい心・行い、善の心・行いと言い換えることができるでしょう。

第三に、「一」は「一筋」とか熟語にして、混じり気なしの心や姿をあらわします。

第四に、「一」は、「一家」「一国」など「全体」も意味します。」

第一の「初の心」について…東井義男先生の詩に…

目が覚めてみたら	生きていた	死なずに	生きていた
生きるための	一切の努力をなげすてて	眠りこけていたわたしであったのに	
目がさめてみたら	生きていた		
劫初(ごうしょ)以来			
一度もなかつた	まっさらな朝のどまんなかに	生きていた	いや 生かされていた

というのがある。

正月の元旦ばかりではない。時は常に「まっさら」だ。

昔あった時などというものはない。

そのまっさらな時に立ち向かうのに、われわれは何となくたぶれた姿で立ち向かっていることか。

どうにもならない過去を背負い込んだり、来るか来ない未来を抱き込んだりして、二度と来ない「今」を取り逃がしている。

前後裁断してまっさらな気持ちで「今」に取り組んでいきたい。

「致知」2月号 卷頭の言葉「『一』の心に学ぶ」より

！どうにもならない「過去」ばかりにとらわれたり・・・

来るか来ない『未来』に不安や心配ばかりせず・・・

令和8年、まっさらな気持ちで「今」に取り組んでいきましょう！

東井義男先生は、以前の通心(信)でも紹介した、ペスタロツチ賞も受賞した兵庫県但馬の教育者で「いのちの教育」の探求に尽くした方です。

